

## 七ヶ浜町立遠山保育所に関する2つの模型

2013年に完成した宮城県に建つ保育園の模型を2つ展示します。

縮尺は大きいほうが1/30、小さいほうが1/2500です。この建築は1,000㎡ほどの規模ですが、一辺が34mの広い園庭を取り囲み、その割に高さが2.6mと低いため、平べったい、わっかの形をしています。保育園の施設というよりも、広い野原に屋根だけをかけ、その一角が子どもの場所になっているような町の公園にある造作物と考えたほうが可能性をより広げるかもしれません。

大きいほうの模型は手で作っているために、ぼろぼろとしています。主に紙で作られていることも一因ですが、建築が出来あがるまでの約1年半の間、何度も悩みつくり変えた結果がそのままつぎはぎ状に痕跡として残っているためです。現地へ持ち運んで、地元の人びとと一緒に模型を覗きこみ、話し合うこともしました。部屋のサイズや天井高、開放感、素材、色、樹木、家具の置き方などたくさんのことを考え、建築をどのようにつくり、どうやって使うのが楽しいか考えつづけました。模型の外側の壁を外し室内を覗きこみ、また戻し今度は外観を考えるとといったようなことも何度もくり返すため、簡単に分解しまたすぐ組立てられるようにしています。手で作ると、つくりながらまた新しいことを思いつき、模型と一緒に考え続けていくことができます。また、考えたことをすぐかたちにできるので、それを見ればその良し悪しが即座に判断できます。あれこれ迷ったときは必ず模型を覗きこみ、疑似体験をして一瞬で選ぶことが肝心なのです。延々と完成は訪れず、永遠につくり続けることができそうなこの模型は、手でなければ簡単につくれません。

いっぽう、小さいほうの模型は、つい最近知った3Dプリンタの最新技術により、ほぼ一瞬にしてある日ぽこんと生まれました。小さいがゆえに保育園が建つ環境や地形との連続性を、一瞬にして俯瞰することができました。大きな模型によって細かいことをずいぶん考えて来たけれど、自分たちがやってきたことが一体どういうことだったのか、この模型を見るとすぐにわかります。周辺環境に溶け込み、一体化してもなお残る自然の中のモニュメントのようなこの建築物の特徴を、よく捉えていると思いました。このような細かい模型はとてもじゃないけれど手では簡単につくれません。大きいほうも小さいほうもどちらも大切なのです。

3Dプリンタによる模型は石膏の粉末を精密に固めてつくられるのですが、ぼく達は今回その技術精度の限界に挑むつもりで、手づくりの大きな模型と同じように、こちら少しぼろぼろさせてみようと考えました。わざと、とても細かい3Dのデータを入力しなるべく小さなサイズでプリント（造形）してもらいました。本当は民家の小さい庇のような細かい要素もデータ上はあるのですが、粉末が固まりきらなかったみたいで、ぼろぼろと落ちてしまいました。

ぼくにとってはどんな模型も少しぼろぼろしていることが重要であることにあるとき気がついたので、そういうことをしました。つまり、模型そのものが目的なのではなく、ぼろぼろとした模型を通じて、実際の建築のことを考え続けることにより集中できるのです。模型が上手くできすぎていると、次の段階へ向かってつくり続けるつもりがなんとなく躊躇してしまいます。ぼろぼろした模型はいろいろなことを想像させてくれ、見ると頭がまたつくりつづけようとしてくれるので、現実には引きずられずに理想を追い求めることができるからなのかもしれません。